

## 〈 岩倉峡の流下能力をめぐる無理解 〉

2008年2月7日  
自然愛・環境問題研究所  
代表 浅野隆彦

### 〔 はじめに 〕

岩倉峡の流下能力について、2008年1月2日付けの質問付意見書 NO.922〈 岩倉峡の流下能力について 〉に対し、第71回委員会(H20.1.29)で河川管理者の回答が示された。(審議参考資料1-1)

この回答に於ける2つの問題点に触れ、批判および疑問を呈するものである。

### 〔 疑問 〕

「川上ダム建設事業について」(第71回委員会・審議資料2-5)で示されている図一補1.1 岩倉峡地点における水位と流量の関係は詳細な説明がなければ、俄かに分かるものではない。離れた地点での水位・流量関係について「相関関係」を推定するという「離れ業」が、どれ程の信頼度があるのかは、データの全て及び水理学上の根拠を含め、明快な説明が欠かせない。然るに完全に欠如したまま、信じなさい！と言うのか。平成5年に河川管理者が行った不等流計算の際には、HWLで3,600m<sup>3</sup>/sを越え、T.P136.85mにおいて3,240m<sup>3</sup>/sであったと記憶している。H-Qの勾配立ち上がりには疑惑が在るのである。

### 〔 無理解を批判する 〕

河川管理者は筆者が行った「等流計算」を評して、次のように述べている。『等流計算は、一定断面、一定勾配で、水面勾配と河床勾配が一致するとの仮定が成立する場合に適用できるもので、岩倉地点のように流量規模によって水面勾配が大きく変わる断面では大きな誤差が生じるため適用できないと考えております。』

しかし、これは実際の計算をよく見ずして、一般論として言っているだけで、筆者がその辺をちゃんと押さえて計算条件を整えている事を見落としてはならない。

- 1) 岩倉観測所第2断面に合わせ、一定断面、一定勾配で、水面勾配と河床勾配を一致させるよう仮定断面を構成して計算している。
- 2) その実態は「最小流下能力」と言っても良い。
- 3) 実際の河道断面に余裕を残す「流体」としての最大流量を弾いている。
- 4) 岩倉観測所における実測の内、最多水面勾配を適用しており、確率的に高い頻度で現れる水面勾配である。参考に、2断面の夫々の計画高水位勾配を水面勾配とした計算も示し、水深が大きい実際観測が無い地点であるから、有り得る「流下能力」とした。

以上のように、水理学の基本を踏んで出している「岩倉峡・計画高水位無害流量」であるから、近似値で有る事と「少なくとも！」という前置詞を付けて主張しているのである。